The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語的皮肉の現象についての理論とその原理 ： 日本語における皮肉の分析を中心に
Author(s)	オーゼロヴァ, アナスタシーア
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 147-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語的皮肉の現象についての理論とその原理

－日本語における皮肉の分析を中心に－

アナスタシーア・オーゼロヴァ

1. はじめに

言語的皮肉の状況的皮肉は、皮肉を聞いた際「これは皮肉だ」と多くの場合すぐに理解できるが、その現象を説明することは非常に難しいことである (Gibbs & O'Brien 1991)。言語学者による数々の研究で言語的皮肉について様々な説明がなされてきたが、現時点で全ての皮肉を説明できる理論は存在しない。本論文では、皮肉に関する先行研究のうち最も重要な研究を取り上げ、その長所と短所について述べた上で、2 つのステップによる言語的皮肉のプロセスを提案する。なお、本稿では、皮肉を普遍的な現象として捉え、日本語の皮肉を他言語でのアイロニー（サーカズムを含む）と同様のものとして扱う。従って、本稿は個々の単語の意味の問題や異文化による皮肉の特徴の差異などについて論述するものではなく、皮肉のメカニズムを普遍性のあるものとして議論するものである。

2. 先行研究の長短

先行研究には、皮肉の現象に関して、エコー、ふり、期待と現実の差、皮肉のスタートポイントを示す、等の様々な理論による説明が存在する。しかし、どの理論も、うまく説明できる皮肉の実例がある一方で、説明できない用例の存在が指摘されている。本節では、収集した日本のテレビドラマの用例を用い、それぞれの理論と長短を簡単に紹介する。

2.1 語用論的原則の違反による皮肉：Grice (1975) と Haverkate (1990)

Grice (1975) は、人間のコミュニケーションが円滑に進むためには、質、量、様態、関連性の四つの公理を守らなければならないという協調原理を打ち立てた。Grice は質の公理に違反することによって発話は皮肉になると主張する。また、皮肉は軽蔑的な批判や侮辱を伝えるとした (Grice 1978)。そして、Haverkate (1990) によると、発話内行為の誠実条件を意図的に破ると発話は皮肉になる。発話内行為の誠実性（「話し手は言うことを誠心的に信じる」）と

Grice の質の公理（「嘘だと信じていることを言ってはならない」）は、発話は本気であると話し手が信じていることであるため、この 2 条件を同じものとして捉えても良いと考えられる。

（1）状況：千秋はのだめのとても汚い部屋を掃除してあげようとしたところ、黒いものが入っている感じの悪い鍋をみつけた。

千秋：おい！　ほらっ！　コレなんだ？
のだめ：多分、クリームシチューです。
千秋：クリームシチューは黒いのか？　とぐろを巻くのか？
のだめ：はい、一年もたつと。　（『Nodame Cantabile』）

例（1）では、千秋はクリームシチューは黒いかどうかなどを知りたい訳ではなく、質の公理と誠実条件を破り皮肉を言う。軽蔑的な批判や侮辱を伝えることも認められた。しかし、次の例をみると、質の公理を破ること以外でも発話は皮肉になり得ることがわかる。

（2）状況：前のシーンで長倉さんがあるおじさんにアダルト雑誌を渡された。その雑誌を捨てる前に 1 ページだけ見ようとしたところを 12 歳の娘に目撃された。その後の会話：

えりな：ただいま。
長倉：あれ？　えりな　どこ行ってたんだ？
えりな：コンビニ。やらしい本は買ったりしてません。　（『最後から二番目の恋』）

例（2）では、えりなの発話は皮肉であるが、質の公理・誠実条件は守られている。しかし、情報が足りないことと、いろいろな意味に取れる曖昧な発話であるため、量と様態の公理が破られているということができる。さらに、ある程度の軽蔑的な批判や侮辱を伝えていることも認められる。

（3）状況：千秋の家にいる三人。ミルヒはのだめに一緒にホテルに帰ってほしいと思っているが、のだめは千秋先輩と一緒にいるべきかミルヒ先生のホテルに行くべきかで迷っている。ミルヒがのだめに一緒に帰るように説きつけている場面。

ミルヒ：のだめちゃん。　わたしがもっと楽しいこと教えてあげます。　美しい夜景の見える部屋で。　フカフカのベット、フカフカの枕。
のだめ：きれいなお部屋。フカフカの枕。
ミルヒ：千秋君ご愁傷さま！　ハハーッ。　（『Nodame Cantabile』）

例（3）では、ミルヒが「ご愁傷さま」と皮肉を言い、ここは葬式の場面ではないため、関連性の公理が破られ、質の公理・誠実条件も破られたと考えられる。ミルヒが「ごめん」という表現を大げさに使用したことにより、この発話は皮肉になっている。この場合、軽蔑的な批判や侮辱を伝えているわけではなく、単に嘲りのような発話であると考えられる。

Grice (1975) の質の公理の違反に他の公理の違反も含め、Haverkate (1990) による皮肉の説明を使用すると、言語的皮肉は字義通りではなく、通常とは違う言い方が用いられているということに収斂できる。質の公理・誠実条件だけでなく、Haverkate の理論では説明しにくい他の公理を破ることも含めることによって発話は皮肉になり得るということが明らかになった。しかし、問題は、公理を破ることで皮肉が成立するとしても、公理を破れば発話は皮肉になるとは必ずしも言えない。例えば、嘘や単に曖昧な発話が皮肉であるとは言えない。上記の用例で見たように、軽蔑的な批判や侮辱を伝えることが必ずしも皮肉の成立に必要である訳でもない。従って、Grice と Haverkate の説明だけでは皮肉を説明できないと考えられる。

2.2　エコーとしての皮肉：Sperber & Wilson (1981) と Kreuz & Glucksberg (1989)

エコーによる皮肉の説明に関しては、Sperber & Wilson (1981) のエコー理論と Kreuz & Glucksberg (1989) のリマインダー理論の 2 つの重要な理論がある。Sperber & Wilson (1981) では、皮肉は、聞き手の発話、ことわざ、一般常識を話し手がエコーすることによって、それに対する話し手の態度や解釈を表していると説明する。

（4）状況：前のシーンで、のだめは千秋に「千秋先輩は鬼で悪魔の俺様」と言った。その後、のだめが千秋の家に来たときに、千秋がのだめの発話をエコーする場面。

千秋：<u>鬼で悪魔の俺さまに</u>、何の用だ？　（『Nodame Cantabile』）

例 4 では、千秋の発話はのだめのエコーであり、千秋は怒っている態度を表しているから、発話は確かに皮肉になっている。

Kreuz & Glucksberg (1989) では、話し手は聞き手の行為や以前にあったイベントをエコーし、それに対して態度を表すことによって皮肉が成立するという。Sperber & Wilson (1981) の理論より適用範囲が広いものであると考えられる。例（3）では、えりなは「やらしい本は買ったりしてません」と言うことで、前のシーンで長倉お父さんがアダルト雑誌を見ていたことをエコーし、批判しているような態度を表していると解釈できる。

エコーによる皮肉の理論の重要な点は、皮肉を言う際、話し手がなんらかの態度を表していることである。Sperber & Wilson は Grice によるこのような新しい見方は伝統的な皮肉の捉え方とは異なるものであることを紹介した。Grice でも気持ちや態度に多少言及はあったが、Sperber & Wilson は話し手の気持ちや態度、解釈が皮肉の大事な部分であると初めて主張したことに意義がある。しかし、エコー理論は多くの研究者によって批判され、「限界のある理論」と呼ばれた。エコー原則は皮肉の説明として不十分であるという主張が多い (Attardo, 1999; Chen, 1990; Schaffer, 1982)。『関連性理論』(Sperber & Wilson, 2012) の 6 章ではもう一度、エコーによる皮肉の説明をやり直し、以前よりは適用範囲が広くなったが、Kreuz & Glucksberg (1989) の理論と同じように、エコーと関係ない事例が説明できないことに変わりはない。

2.3 「ふり」としての皮肉：Clark & Gerrig (1984) のふり理論

この理論は Fowler (1965) と Grice (1978) の皮肉に関する説明に基づき構築された。Fowler の説明では、皮肉を理解するために、話し手と聞き手の間に合意点が必要であるということである。Grice の説明に使用された部分は、皮肉は感情・態度・判断を表すことであり、言語的皮肉は「ふり」のようなものである。話者は聞き手にふりを気づいてほしいが、「これはふりだ」と宣言すると、皮肉の効果が無くなる。Clark (1996) は次のような皮肉の例を挙げている。

(5) A: 素敵な天気ですね！

B: そうですね！

実際の状況：A と B は良い天気を期待していたが、通り雨にあった。

ふり状況：素敵な天気を楽しんでいる A と B。

対照：実際の状況は A と B の期待と異なる。

態度：A と B は不満を表している。 (Clark, 1996)

A が実際のこと（今の天気）を知らない人のふりをし、他に（天気のことを）知らない人は何も気づかないが、理解できる人は話し手のふりに気づき、ふり遊びを楽しむことになる。

ふり理論は以前の理論と異なり、新しい皮肉の観点が紹介されており、興味深い理論である。特に皮肉と皮肉ではない発話のイントネーションが異なり、話し手が役割語を使用するように誰かのふりをするというところは、これ以前の研究には見られない視点であり、重要

である。しかし、ふり理論は、批判され (Attardo, 1999; Utsumi 2000)、「マネ理論」とも呼ばれ (Sperber & Wilson, 1984)、現段階では認められていない。確かに、全ての言語的皮肉がふりを含むとは言えないため、説明できない例が多く、包括的な皮肉の説明としては不十分な理論である。

2.4 ほのめかしとしての皮肉：Utsumi (2000) の暗黙的暗示理論 と Kumon-Nakamura, Glucksberg & Brown (1995) ほのめかし理論

Utsumi の暗黙的暗示理論はほのめかし理論に非常に似ているがニュアンスの差異がある。Utsumi (2000) によると、皮肉は次の流れがあると言う。

1. 話し手は期待がある。
2. 話し手の期待が破られた。
3. 話し手は期待と実際の状況の落差に対して嫌味を言う：期待したことを示す。語用論的な不誠実性を含め、意図的に一つの語用論的原則を破る。破られた期待に対して話し手の否定的態度を間接的に表わす。

（6）状況：母親が息子に部屋の掃除をするように言ったが、息子は漫画に夢中になって言われたことを忘れてしまった。母親が戻ってきて、汚い部屋を見て次のことをいう：

母親：<u>この部屋は超綺麗だね！</u> (Utsumi 2000)

確かに、例（6）では話し手の期待（部屋が掃除されて綺麗になること）が破られ、母親は息子に否定的態度を表していると考えられる。しかし、例（6）を説明できるとしても、次の例（7）は Utsumi（2000）では説明できない。

（7）状況：母親は綺麗な服を着ている娘をみて、次のことを言う：
母親：どこ行くの？　おしゃれして
　娘：森の運動会
母親：（まじめに）あッ、デート？
　娘：そう。<u>熊さんとデート</u>　（『Orange days』）

例（7）では、娘が何か期待していた訳ではなく、破られた期待を示している訳でもないため、Utsumi の暗黙的暗示理論では説明できないと思われる。

Kumon-Nakamura, Glucksberg & Brown のほのめかし理論では、皮肉は必ず事前の期待・一般常識があり、語用論的な誠実性に違反し、破られた期待や一般常識などを示す。この理論で考えると、例（7）を説明できると考えられる。もし、娘にとってデートに関する質問をすることが常識的でないのであれば、ほのめかし理論による説明は成功する。これまで紹介した理論のなかで、ほのめかし理論はかなり説得力があると思われるが、感情や態度の観点が含められておらず、エコーによる皮肉を説明しにくいという難点がある。

この二つの理論の強みは、皮肉を言うために、破られた期待・一般常識のような皮肉を言う理由、いわゆるきっかけやスタートポイントが必要であるということである。以前の皮肉の研究ではスタートポイントについての言及がほとんどなかった。Kumon-Nakamura, Glucksberg & Brown のほのめかし理論と比べ、Utsumi の理論は破られた期待と否定的な態度や嫌味に限られている。そのため、ほのめかし理論の説明の方が適用範囲が広い。しかし、ほのめかし理論も、うまく説明できる事例がある一方で、説明できない事例もある。例えば、例（3）では、ミルヒは何も期待することや、破られた一般常識などがなかった。そのため、この理論だけで包括的に皮肉の現象を説明することはできないと思われる。以上、皮肉の研究における数々の理論を簡単に紹介し、その長短を指摘した。

3. 皮肉の原理

2 節で取り上げた理論による皮肉の説明はそれぞれ異なるが、全てに共通する一つのパターンがあると考えられる。本節では、そのパータンを指摘し、そこに見られる 2 つのステップによって皮肉のプロセスを説明できることを提案する。皮肉のプロセスが発生する場合には、下記の見られるパターンが存在すると思われる。

話し手のアテンション → 態度 → 通常と違う言い方 → アテンションが当たっている物事を示すこと。

話し手のアテンションというのは、強い気持ち（怒り、嫌味、迷惑、忌々しさ、等々）を起こさせたものに当たっている焦点であり、冗談の際、嘲りや笑いのターゲットに当たっている焦点であり、皮肉のスタートポイントである。アテンションがあるということは、それと同時に必ず対象に対しての話し手の感情や態度が存在する。次に、語用論的な原則（協調原理や発話内行為など）が破られ、通常とは違う言い方が用いられる。語用論的な原則が破られても聞き手に皮肉の意味に受け取られにくいことがあり、その場合、通常とは違うイン

トネーションや非言語的な合図が含められる。その具体的な区分や種類は今後の課題にする。状況的皮肉では知識と実際の状況の間に自然にギャップが起こることに対し、言語的皮肉では発話と実際の状況の間に意図的にギャップを作るため通常とは違う言い方になると考えられる。そして、内容は必ずアテンションが当たっている物事を示している。この原理を図式化したものが下記の図 1 である。

話し手のアテンション 態度	ステップ 1： 話し手のアテンションと態度
↓	
通常とは違う言い方 アテンションが当たっている物事を示す	ステップ 2： アテンションを示す通常とは違う言い方

図 1：皮肉の原理

皮肉の原理には、言語におけるステップと言語以前のステップがあると想定される。皮肉ではない普通の発話の場合、話し手は相手に伝えたいことを情報として伝える。それに対して皮肉の場合、情報ではなく態度や感情を伝えたいから通常とは違う言い方を用いると考えられる。つまり、話し手は最初のステップとしては、何かにアテンションを当て、皮肉ではない場合は情報、皮肉の場合は態度や感情を伝えたくなる。次のステップ 2 では、通常とは違う言い方を用いることで、アテンションを向けた物事を示していると考えられる。つまり話し手のアテンションとアテンションが当たっている物事は同じことになる。

2 節で紹介した理論を 2 つのステップに分けてみると図 2 の結果になる。全ての特徴が 2 つのステップに振り分けられるが、ふり理論における合意点の特徴は皮肉に限らず、一般的な会話に必要なところであり、本理論では使用する必要がない。

先行研究		ステップ 1	ステップ 2
Grice (1975; 1978)	➢ 質の公理を破る。		○
	➢ 軽蔑的な批判・侮辱を伝える。	○	
	➢ 感情・態度・判断を表す。	○	
Haverkate (1990)	➢ 発話内行為の誠実条件を破る。		○
Sperber & Wilson (1981)	➢ 聞き手の発話・一般常識をエコーする		○
	➢ 態度を表す	○	
Kreuz & Glucksberg(1989)	➢ 聞き手の以前の言動をエコーする。		○
	➢ 態度を表す。	○	
Clark & Gerrig (1984)	➢ 実際に存在する・しない人物のふりする。		○
	➢ 感情や態度を表す。	○	

Kumon-Nakamura, Glucksberg & Brown (1995)	➢ 意図的に誠実条件を破り、ふりする。		○
	➢ 事前の期待・一般常識が破られたことを示す。	○	
Utsumi (2000)	➢ 話し手の期待が破られる。	○	
	➢ 期待と実際の状況に対して嫌味を言う：期待したことを示し、語用論的な不誠実さを含め、意図的に一つの語用論的原則を破る。		○
	➢ 破られた期待に対して態度を表す。	○	

図 2：皮肉の理論の２つのステップへの分け方

図 2 のとおり、皮肉のプロセスは 2 つのステップに分けることができる。Grice（1975）の場合、軽蔑的な批判・侮辱を伝えることと感情・態度・判断を表す（1978）ことは感情や態度に関するステップ 1 に含まれる。そして、質の公理を破ることは言語でアテンションを当てたことを示すことであるため、ステップ 2 になる。Haverkate(1990)の場合、発話内行為の誠実条件を破ることは通常とは違う言い方であるため、ステップ 1 であり、それ以外のステップ 2 に関する条件はない。また、Sperber & Wilson (1981)の理論では、態度のところはステップ 1 であり、聞き手の発話・一般常識をエコーするというのはアテンションを表すことでありステップ 2 になる。また同じく、Kreuz & Glucksberg(1989)の場合、態度がステップ 1 になり、聞き手の以前の言動をエコーすることはステップ 2 である。Clark & Gerrig　(1984)では、感情や態度のところはステップ 1 であり、ふりをすることはステップ 2 である。また、Kumon-Nakamura, Glucksberg & Brown（1995）の場合、事前の期待・一般常識が破られたことは皮肉のきっかけやスタートポイントであり、意図的に誠実条件を破ることはステップ 2 である。最後に、Utsumi (2000)では、話し手の期待は皮肉のスタートポイントであり、態度のこともあり、2 つともステップ 1 のことである。そして、嫌味を言い、語用論的な不誠実さを含め、意図的に一つの語用論的原則を破ることはステップ 2 のことである。このように、皮肉の理論における皮肉の現象に対しての観点は異なることにもかかわらず、全ては 2 つのステップに分けられ、同じパターンがあることは明らかになった。このパターンを用いることで皮肉の用例を一つの現象として説明できるようになった。

次に、それぞれの理論を紹介した時に用いられた事例を 2 つのステップのパターンの観点から分析し説明する。

例（1）では、「クリームシチューです」という不十分な応答にアテンションが当たっており、千秋は怒っている態度を表したい。そして、「クリームシチューは黒いのか？とぐろを

巻くのか？」という不誠実的、質の公理を破る通常と違う言い方を用い、「クリームシチューです」の応答に対して皮肉を言う。

例（2）では、長倉さんが前のシーンでアダルト雑誌を見ていたことにえりなのアテンションがあって、えりなはまだ怒っており、それを態度で示そうとしている。そして、「やらしい本は買ったりしてません」という量と様態の公理を破る曖昧な表現を用い、アダルト雑誌にアテンションがあることを示している。

例（3）では、千秋が負けて、ミルヒが勝ったということにミルヒのアテンションがあり、千秋を笑いたい気持ちがある。そして、「ご愁傷さま」という通常用いない表現を使用することによって質と関連性の公理を破っている。嘲りのような態度でアテンションを示している。

例（4）はエコーの例である。エコーの場合、通常と違うのはエコー表現の部分である。エコーの発話は新しい情報がないため、量と様態の公理が破られていると考えられる。それに加え、アテンションが当てられている物事の示し方としてはエコーが最も強い。また、Sperber & Wilson によると、エコーによる皮肉の重要な部分は考えなどの内容の情報ではなく、話し手の態度や反応を伝えることである(Sperber & Wilson, 2012)。そのため、例（4）では、「鬼で悪魔の俺さま」と言われたことに千秋のアテンションがあり、傷ついたことや怒りの態度を表している。そして、のだめの発話をエコーすることでアテンションを表すことになる。

例（5）では、話し手がいい天気の期待、雨にアテンションがあり、残念な気持ちや、少し怒った態度を表している。そして、質の公理・誠実性の条件を破る言い方でアテンションがあった天気のことを述べていると考えられる。例（6）では、息子の部屋が綺麗になるだろうという期待が破られたことに母親のアテンションがあり、怒りの態度を表している。そして、質の公理・誠実性の条件を破る言い方で綺麗になっていない部屋に対するアテンションを示している。

例（7）では、娘が母親に「あ、デートに行く？」と言われており、そのような質問を嫌がっている娘のアテンションがその発言に向かっている。それに対する怒りを「熊さんとデート」という質の公理・誠実性の条件を破る言い方を用いることによって示している。この発言は、デートの質問にアテンションがあったことを示している。

以上、先行研究では包括的に説明できなかった皮肉の現象を、アテンションと通常とは異なる言い方という観点を用いることで説明できることを証明した。

4. まとめと今後の課題

本論文では、皮肉に関する最も重要な先行研究を概観し、それぞれの長短について述べた。語用論的な原則を破ることにより発生するという伝統的な皮肉の捉え方は、皮肉は字義通りの意味ではなく通常とは違う言い方であるということを適切に説明できるが、それだけでは不十分である。また、エコーによる皮肉の捉え方では、話し手の態度の一部が重要であることが主張されているが、エコー理論で説明できることはエコーに限られているため、エコーが用いられていない実例を説明することはできない。ふり理論の重要なところは、皮肉のイントネーションは通常の発話と異なるということであるが、全ての皮肉の事例を「ふり」と呼ぶことができないことが欠点である。最後に、「ほのめかし」としての皮肉の説明では、皮肉が成立するためにはスタートポイントが必要であるとことが紹介されている。それぞれの理論にはそれぞれの限界があるため、説明できない事例が存在することが確認できた。

上述の理論は皮肉の研究に寄与しており、その長短を整理した上で、本稿では 2 つのステップによる皮肉の原理の説明を試みた。先行研究では直接的に述べられていないが、皮肉には一つのプロセスがあると考えられる。そのプロセスは 1）話し手のアテンションと態度、2）アテンションを示す通常と違う言い方、2 つのステップに分けられる。このステップに分けることにより、先行研究がそれぞれ対象としている部分が適切に分けられ、皮肉の全ての事例が説明できるようになった。

以上、本稿では皮肉のプロセスを明らかにしたが、皮肉にはまだ数々の解明されていない点がある。なぜ通常の言い方の代わりに皮肉を使用するのか、なぜ皮肉は強く気持ちを伝える方法になりうるのか、等については今後の課題としたい。

参考文献：

Attardo, S. (2000) Irony as relevant inappropriateness. Journal of Pagmatics 32(6): 793-826.

Chen, R. (1990) Verbal irony as implicature. Unpublished Ph.D. dissertation, BSU, Muncie, Indiana.

Clark, H. (1996) Using Language. CPU.

Clark, H. H. & Gerrig, R. J. (1984) On the pretense theory of irony. Journal of Experimental Psychology: General, Vol.113(1).

Fowler, H.（1965）A dictionary of modern English usage (2nd ed.). Oxford, England: OUPress .

Gibbs, R. & O'Brien, J. (1991）Psychological aspects of irony understanding. Journal of Pragmatics 16(6):523-530.

Grice, H. P. (1975) 'Logic and conversation' In Cole, P. & Morgan, J. (eds.) Syntax and Semantics, Volume 3. New York: Academic Press. pp. 41-58.

Grice, H. P. (1978）Further notes on logic and conversation. In: P. Cole, ed. Pragmatics, vol. 9, 113-127. New York: Academic Press.

Haverkate, H. (1990) A speech act analysis of irony. Journal of Pragmatics 14(1), 77-109.

Kreuz, R. J. & Glucksberg, S. (1989) How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. Journal of Experimental Psychology: General 118(4): 374-386.

Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S. And Brown, M. (1995) How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. Journal of Experimental Psychology*:* General 124: 3-21.

Schaffer, R.. (1982) Vocal clues for irony in English. Unpublished Ph.D. dissertation, Ohio State University.

Sperber, D. & Wilson, D.（1981）Irony and the use-mention distinction. In: Peter Cole ed., Radical pragmatics, 295-318. New York: Academy Press.

Wilson, D., & Sperber, D. (2012) Meaning and Relevance. Cambridge U.K.: Cambridge University Press.

Utsumi, A. (2000) Verbal irony as implicit display of ironic environment: distinguishing ironic utterances from nonirony. Journal of Pragmatics 32, 1777-1806.

調査資料：

生野慈朗　(2004)『Orange days』TBS.

二ノ宮知子　(2007)『Nodame Cantabile 』フジテレビ.

宮本理江子 (2012)『最後から二番目の恋』　フジテレビ.